

## 論文の内容の要旨

論文題目 関東の都市における歴史的な街路パターンの計画技法に関する研究  
- 「第一軍管地方二万分一迅速測図原図」に記録された情報を中心として -

氏 名 花 澤 信 太 郎

### 第1章 研究の背景と目的

#### ・研究の背景と意義

日本の多くの都市は、今後人口の減少と市街地の縮小という局面を迎えることが予想され、もとめられる都市の空間像が現在までとは異なったものとなることが考えられる。このような背景のもとで、現在の都市の構成原理に強く影響をおよぼしていると考えられる、歴史的な街路の空間構成について考察することは、これからの日本の都市のデザインを考える上で、有益な知見をもたらすものと考えられる。

#### ・既往研究のレビュー

従来論考では、都市の中における場面に関する論考、城下町、宿場町など特定の出自の都市に関する論考が発表されており、それぞれの形態についての分析が加えられている。また、都市史の立場から各時代の都市について通史的に分析した論考も発表されているが、同一の時代における、都市の出自をこえた街路の形態の比較分析という点については、まだ考察の余地があると考えられる。

#### ・研究の目的と方法

本研究では、近代都市計画導入以前の関東平野における、一定規模以上の都市と集落の街路の構成を悉皆調査することによって、その構成原理について考察することを目的とする。

### 第2章 近代都市計画導入以前における都市の形成

#### ・古代から戦国時代まで

藤原京、平城京、長岡京、平安京などの都市群は、7世紀末には条坊制による都市を計画する技術が、そして8世紀初頭にはこれを実現する能力が大和朝廷にあったという点を示している。その後、戦国期から近世には城下町という形で、計画された都市郡が全国各地において建設された。

・徳川家康入城以降の関東平野の整備

全国の統一をなしとげた徳川家康は、江戸に入城すると、江戸への陸路と交通網を整備した。関東平野の都市の中には、このような整備をうけて江戸時代に発展したものが存在する。

### 第3章 「第一軍管地方二万分一迅速測図原図」についての検証

・成り立ちと復刻までの歴史

「第一軍管地方二万分一迅速測図原図」、(以下本研究では「迅速測図原図」とする)は、1880年(明治13)から1886年(明治19)にかけて、陸軍参謀本部によって実施された、わが国初の広域測量の成果である。測量の範囲は、三浦半島、房総半島をふくむ関東平野全域におよび、その特徴として次の点があげられる。

1. フランス式の彩色図として作成されていることで、さまざまな土地利用の種別が理解できる
2. 等高線による地形の表現、および河川が記録されており周囲の地理的状況が把握できる
3. 家屋の様子が、記録されているために、都市における街並みの様子を把握することが可能となっている

・「迅速測図原図」に関する先行研究

先行研究においては、「迅速測図原図」が当時としては最新の測量によって表現されたことが指摘されている。また、東京と横浜、その他特定の地物をのぞいては、維新時と大きな変化がなかったことが指摘されている。

### 第4章 関東平野における一定規模以上の都市の形態の比較

・一定規模以上の都市の選定と分類

対象となる街の選定に関しては、つぎの基準を満たすものとする。

1. 両側に連担した町並あるいは7割以上の密度で家屋が記録されている街路。
2. そのような街路が合計10町以上一定の地域に記録されていること。

・選定された都市の全体の形状の分類

本研究においては、定住地の全体形状を次のように分類する。

- A. 带状型 (主要な街路が1方向で街区の形成されていないもの)
- B. 带状複軸型 (主要な街路が2方向以上で街区の形成されていないもの)
- C. 带状街区型 (主要な街路に沿った副次的な街路により街区が形成されているもの)
- D. 面状街区型 (2方向以上の主要な街路からなり面状の街区が形成されているもの)

・選定された都市の街路の形状の分類

さらにそれぞれの主要な街路の形態に着目すると、次のような分類が可能になる。

1. 直進路（街路が一定の方向を向いているもの）
2. 屈曲路（街路に明確な屈曲の認められるもの）
3. 湾曲路（街路が湾曲しているもの）
4. 複合路（上記の組み合わせか特殊な形態のもの）

以上の分類における街路の形態と地形の関係を分析すると、歴史的な都市の街路の形態においては、山間地に屈曲路があり、平野部に湾曲路があるなど、さまざまな地形における街路の計画において、かなりの選択性があることが推察された。そこで次の事項に着目しながら、街路の形態の分析を行うこととする。

1. 宿場町のなかでも、江戸四宿とよばれた、品川宿、板橋宿、内藤新宿、千住宿の各宿は、それぞれ明確に違う。それらの街路の構成はどのようなものであったか。
2. 東海道、中山道、甲州道中、日光道中の主要な4つの街道の宿場町は、それぞれ形態に関連性が存在するか。
3. 線状形成の都市、面状形成の都市の双方において、街路が直進路から形成される場合、屈曲路から形成される場合、湾曲路から形成される場合が認められるが、それぞれの構成についてどのような特徴があるか。

## 第5章 江戸四宿における街路構成の比較

この章では、品川宿、板橋宿、内藤新宿、千住宿の江戸四宿における街路構成の比較と分析を行っている。その結果として、次の点が導出された。

1. 品川宿は、品川橋を中心として南北に街路からの景観を意識しながら形成された可能性が推察される。
2. 板橋宿における板橋では、品川宿における品川橋と同様の、街路が橋を渡るときの、回りこむような形態が確認される。
3. 内藤新宿は、地形や玉川上水を意識しながら、線分による街路構成がなされている可能性が推察された。
4. 千住宿では、千住大橋を中心として、微妙な角度を伴う街路構成がなされている。

## 第6章 主要街道の都市における街路の形態の比較

この章では、江戸からの五街道について、その宿駅の街路の形態を比較している。その分析の結果は次の通りである。

1. 東海道の各宿は、宿の内部において街路がその方向を変えるような位置に計画的に宿駅が立地させられた可能性が推察されること。また、宿駅の内部においては、橋の近くに高札が設置される傾向が大きいこと。
2. 甲州道中においては、途中最大の宿駅であった横山宿と、日本橋から最初の宿であった内藤新宿において、屈曲する街路の構成が認められる。
3. 中山道においては、鴻巣宿以南の宿駅と、熊谷驛以北の宿駅における街路の方向性が大きく2つに大別される。
4. 日光道中においては、古河宿以南の宿駅と、野木宿以北の宿駅における、街道から宿場町への導入部分の街路構成に相違がみられること。

以上の分析から、主要な街道における宿駅の形態は、各街道に個別の特徴をもつことが明らかとなった。

## 第7章 主要な街路の形態の区分ごとの構成の分析

この章では、第4章において抽出した都市における主要な街路の形態の分類中で、

1. 直進路
2. 屈曲路
3. 湾曲路

の3種類の街路をもつ都市について、それぞれ線状・面状2種類の合計6つの分類における対象を選定し、それらの街路のパターンについて検討をおこなっている。その結果として、次の点が導出された。

1. 主として直進路からなる町であっても、その細部には街路の屈曲や曲線に街路の構成が認められること。
2. 街路に屈曲が認められる都市については、その屈曲には当初からの計画意図が存在する可能性が推察される。
3. 湾曲路の認められる佐原村については、先行の報告においてはその街路は自然発生であると解釈されてきたが、計画的にその形態が決められた可能性が推察されること。

## 第8章 街路構成の読解

この章では、前章までの内容をうけて、街路構成の背後にある思想について考察している。その主な内容は次の通りである。

1. 関東における歴史的な街路の空間構成においては、自然の地理的な変化に街路の空間の変化が重ね合わせられている、いわば空間の変化の重奏性をもった構成が各地で共通的に確認された。

2. そのような場合の空間の変化は、街路の角度をもってなされる場合と、街路における曲線をもってなされる場合がある。
3. さらに、関東における歴史的な街路の空間構成においては、1キロメートルから数百メートルの長さにおいて、シークエンスの変化を作り出すような空間構成がなされていたことが推察されること。

## 第9章 まとめと考察

この章では、本論文の分析から導きだされた知見をもとに考察を行っている。その内容は次の通りである。

1. 関東平野の歴史的な地形図を使用して、近代都市計画以前の定住地を悉皆調査することにより、それらが持つパターンが明らかになった。
2. 近代都市計画以前の関東平野における街路の計画については、多様な主体による多様なデザインがなされていた可能性が推察された。
3. 街道や水系に確認された、それぞれに共通してあらわれる街路の構成パターンは、それらの都市間における相互参照、あるいは共通する計画意識の存在の可能性を示唆するものである。
4. 歴史的な街路の構成については、街路の構成の基本的なパターンを意識しながら、それぞれの都市における工夫が加えられていた可能性が推察された。
5. 以上のような空間構成の意識と方法は、これからの日本の都市空間を考える上で、有益な情報をもたらすものと考えられる。